

書 評

前川喜平 著

小児リハビリテーションのための神経と発達の診かた

江藤文夫 (東京大学医学部附属病院リハビリテーション部)

本書は小児のリハビリテーションに携わるコメディカルの人々を主な対象として、まとめられたものである。既に教科書としての評価が確立された「乳幼児の神経と発達の診かた」を元にして、子供の発達チェックと神経学的診察の基本がすべて記載されている。

医療は人間相手であるから、誰でも自らの体験に照らして判断することが多い。しかし、乳幼児期の記憶は多くの場合曖昧である。「いつごろ歩き始めたか覚えているか」と問われても困惑する。生後何か月頃から寝返りをして、はいはいをして、歩き始めたかは知識として身につけるものである。兄弟姉妹の多い家庭では弟妹を見ながら、子供ができると毎日観察していたのに乳幼児の発達過程は知識として体系化されない。やはり良いテキストが必要である。

小児の発達という観点からまとめられた写真集として、J. H. de Haas による、THE DEVELOPMENT OF THE INFANT, The first year of life in photograph が有名である。脳性まひ児の療育の世界で高名な Bobath も推奨したこの本は、3 か月を 1 単位として、その

間の始めから終わりまでに乳児がどのような動きを示すかを説明し、同時期に獲得されてくるさまざまな動作の写真が並べられていて、発達の経過を洞察する能力を養うことができる。しかし、異常の程度を判断し、治療法を選択するためには発達神経学の知識を組み合わせる必要がある。

行動科学の展開は小児神経学やリハビリテーションに多大な影響を与えてきた。行動の観察は自然に生じた刺激に対する応答だけでなく、人為的に加えられた刺激に対する応答を観察することで、その乳幼児の状態への理解を深めることができる。手のひらに触れたり、抱き上げて傾けてみたりしたときの反応を観察したら、さらに、標準からの偏倚を的確に記述することも大切である。小児リハビリテーションに携わる人々にとって、本書は豊富な写真に加えて診察法と診断に関する簡潔にして十分なテキストであり、すばらしい贈り物である。コメディカルだけでなく、リハビリテーション医にとっても必携の書として推薦したい。

(B5 頁 100 3,300 円+税 2002 新興医学出版社 刊)